

一読してみると率直に「通り一ぺん」のものでした。どうしても自信が持てなかつたので、鞄の中に突っ込んでしばらくそのままにしていました。ところがアイソトープの取り扱いをめぐる事件が各地で発生してきました。この際、アイソトープを使つてゐる全事業所の総点検をやり、その結果に基づいて抜本的な対策を立てようと考へたのです。

なにしろかつてはアイソトープを扱う事業所が數十あるいは数百ぐらい。しかも限られた人数で処理していました。それが、三千三百事業所にふくらんだのに、昔ながらの人数、昔ながらの方法でやつていたのです。仕事にほこりが出ないほうがむしろおかしいぐらいでした。そこで抜本的な法律改正に取り組むと同時に、当面の対策としてまず運用を改めることにしました。また、科学技術庁だけで処理できる問題でもないので、たとえば労働安全衛生は労働省にといった具合に、文部省、厚生省などの関係省庁にも、それぞれの分野で協力してもらうことにしたのです。それと、この年（四十九年）の十月末には全国の事業所による団体も組織化させ、業界としての自主的な管理制度を強化するようにしました」

地味な問題だったが森山にとっては思い出深い仕事の一つだったようだ。

## 第十七章 『むつ』出港・そして……

### 嵐の中の出港

「いまになつてみると、科学技術庁の長官時代は苦労ばかりでしたね。僕もいろいろな問題の解決に全力を尽したけれど、その中でいまもつてひつかかっているのが『むつ』ですよ」  
かつて森山がこう語ったことがある。

森山の科学技術庁長官在任期間は四十八年十一月二十五日から四十九年十一月十一日までの丸一年間だが、この期間ほど科学技術庁が大忙しだったことはあるまい。前述したようにまるで森山の着任を待ち構えていたかのごとく次々と問題が発生し、「第二次田中内閣中、もつとも多忙な大臣」などと評されたものだ。数々の難題を抱え込んだ森山だったが、その中でもつとも大きな問題が原子力船『むつ』だった。

巨大な鉄くずと化し、再び生命を蘇らせ、洋上を走る夢が消えたにもかかわらず、いまだに政治

の具として、また一種の“金づる”として青森県の関根浜新港に巨体を晒し続けている原子力船『むつ』。その『むつ』が本来の使命の達成を目指して太平洋に乗り出したのは四十九年八月二十六日午前零時三十分のことだった。

出港のゴーサインを出したのは森山長官自身である。

「僕が大臣に就任した日の翌日、前田佳都男前大臣と事務引き継ぎをやりました。その席で前田さんが“（四十八年の）十一月二十八日か二十九日に『むつ』が出港する手ははずになつていて、もうボタンを押すだけだ。残念ながら内閣改造で自分はやれなかつたので、森山さん、あなたがやつてくれ”といわれた。そこで“在任中に必ずやります。しかし、總理や他の閣僚との相談は済んでいるのですか”と聞くと“そこまでは……”とあいまいな返事でした。軽く考えていたのでしょうか。僕は“よく相談してやりますよ”といったのですが、約束もあるし、努力を重ねたうえで出港にこぎつけたのですよ」

『むつ』は反対派漁民や動員された労組員たちの漁船による阻止行動の間隙をぬつて出港した。出港から七日目の九月一日『むつ』は青森県尻屋崎東方八百キロメートル北緯四十一度二十分、東経百五十一度〇八分の北太平洋上で火入れ試験中だった。ところが午後五時十七分、原子炉出力を一・四%まで上げたところで、原子炉制御室の後方壁面のブザーが鳴った。上甲板の鋼製原子炉ハッチの側面に配置してあった測定器がガンマ線を感じし警報装置が作動したことこそ、対策の万全性や安全性の高さに配置してあった測定器がガンマ線を感じし警報装置が作動したのである。

このとき検出された放射線の量は最高値で毎時〇・二ミリレントゲン。これは放射線としてはそ

の場所に連続五百時間いると、胸部レントゲン写真一回分に相当する程度の微量であり、家庭用カラーテレビの出す放射線の規制値の半分以下というものだった。

実験である以上、異常や問題点の発生はある程度つきものといつていい。だからこそその実験なのだ。むしろそれを微少な段階で発見し警報装置が作動したことこそ、対策の万全性や安全性の高さを証明したとみることができる。

が、マスコミは放射能と放射線の区別もロクにつかない程度の知識しか持たないにもかかわらず、その“危険性”をセンセーショナルに報道した。一方、野党各党は『むつ』を政治的に利用することしか考えておらず「それみたことか」とばかりに“事件”を煽り立て、政府や自民党、当の責任者である森山科学技術庁長官らを激しく非難した。

いったい『むつ』は「危険な放射能の塊」だったのか。あの出港は「強行」出港だったのか。あの事件は『むつ』の欠陥を証明する“事故”だったのか。

その前に『むつ』の歴史を追つてみる。

## 【むつ】の歴史

昭和三十六年二月八日、原子力船建造を含む原子力開発利用長期計画を原子力委員会が決定、同年六月八日には日本原子力船開発事業団法が成立し八月に同事業団が設立される。四十二年九月五日、政府は原子力船の定係港にむつ市を決定し、追つて十一月十四日、青森県ともつ市が同意する。

四十三年十一月に船体部分の建造を開始した原子力船は翌四十四年四月、公募の結果船名を『むつ』と決定した。この年の六月『むつ』は東京で進水式を行なったあと、七月には定係港むつ市に回航し、四十七年八月には原子炉が完成、九月に炉と燃料の積み込みを終了してあとは出港を待つばかりとなつた。

それから二年後『むつ』は出港し“事故”を起こした結果、一ヶ月以上にわたつて洋上を漂流したうえで十月十五日、ようやくむつ市の母港に帰る。その後、五十二年に長崎県佐世保で燃料棒の抜きとり作業などを行なつたのち再びむつ市にもどり、現在は『廃船』の日を待ちながら、最後の土地となつた関根浜新港に錨をおろしている。

科学技術の粋を集め、日本の将来を切り拓くための重大な使命を負つて誕生するはずだった『むつ』がなぜ、放浪と漂流の旅を続けなければならなかつたのか。『むつ』にとつて最大の不幸は本来、純粹に科学上の問題として扱わなければならなかつたものが、政治闘争の具にすりかえられ、もて遊ばれてあげくは“たかり”の道具にされてしまつたことだろう。

## 「むつ」をめぐる環境

むつ市が定係港に決定した四十二年当時『むつ』はむしろ、過疎の地に繁栄をもたらすものとして期待と歓迎の声をもつて迎えられた。青森県知事は定係港とすることに同意する条件として「原子力船の第一船、第三船が建造される場合にも、下北埠頭（大湊港）が定係港として指定されるこ

とを、方針として明らかにすること」を政府ならびに原子力船事業団に要請しているのである。

それから七年『むつ』を見る目は完全に一変した。むつ湾でのホタテ貝養殖の成功、地元むつ市の市長に革新系が当選したこと、原子力船事業団をはじめとする関係省庁の対応のまづさなどが重なつて『むつ』をとり巻く環境は大きく変化した。

振り返つてみると地元の反対運動の大きな理由のひとつに「ゴネ得」があつたといわざるを得ない。国家的事業や公共事業が、地域エゴやゴネ得で食い物にされる國は『むつ』の事件以来、日本中に拡散してしまつたといつていい。森山はこういった。

「船用原子炉の試験は出力二〇%まで岸壁でやるのがどこに國でも通例だつた。しかし地元から反対の声もあつたので『むつ』は通常エンジンで出航し、太平洋上で試験することにした。これはきわめて異例なことでね。放射線洩れの問題にしても通常の岸壁試験でやつていれば、措置の仕方も事の成り行きも違つていたでしよう。そこまで

『むつ』出港・そして



「エネルギーに関するワシントン会議」で米国NASA長官と懇談する森山。(昭和49年2月)

譲歩したのに、それでも地元がうんといわない。ちょうどそのころ、僕が大臣に着任したのです。

いろいろ事情を調べてみたところ、一言でいえば出港に際して、俗にいうイロをつけてもらいたいということだったのですね。いろいろな要望が出ていたわけですが、『そういうことならば』、ということで結局、地元の長年の懸案だったバイパスを建設する、有線放送の設備を作る、また市内に体育馆を作るほか、漁業組合に対しては一億五千万円の補助金を出し、ホタテ貝の値段が下がった場合の買い上げ資金一億円を事業団が預託する、といったことで話がついたのです。今となれば大したことじやないよう見えますが、当時は知事や市長の銅像が立つくらいの仕事だといわれていました。だからそのころ「もし、知事や市長の銅像ができたら、その傍に科学技術庁長官の小さな石の地蔵さんでもつくってくださいよ」と、冗談にいつたくらいでしたよ」

県側とは話がつき大部分の漁民も了解した。しかし、一部の漁民は強硬に反対を続ける。この反対を支え、煽ったのが政治闘争化を狙う野党や労組、危険性を声高に叫ぶマスコミだったといえる。それがいかに非科学的でデマゴーグに満ちたものであったか。

昭和四十八年の春ごろ、社会党の某青森県議は漁民の集会でこういい放った。

「放射能は恐しいよ。『むつ』が湾内を汚すだろう。それがたまってな。一定の限界まで達するとドカーン、核爆発起こすんだ」

これを聞いていた新聞記者に対し、集会が終ってから同県議は「この程度に話を大きくして聞かせんと原子力について無知な漁民は意のあるところを理解してくれんてな」といったという。

「こうした野党やマスコミの煽動によって一部漁民は最後まで反対を叫んだ。反対漁民は英雄になり、森山は悪者になつた。森山は計画どおりに出港のサインを出したが、マスコミは「强行出港」と断じた。

「前にもいつたように譲歩を重ねたうえ、出港の時期も数度にわたって延期しました。その結果、最終的には知事のほうからも『全漁民の賛成は得られなかつたが、大部分が賛成であるから政府の判断によつて進められて結構である』、という連絡があつた。僕たちから見れば青信号が出たわけです。日本ぐらい言論の自由な国はありませんから、何をするにしても百人が百人、全部うんというようなことはまずない。全員がうんというのを待つていらつていのことはできなくなりますよ。この問題のように百人のうち八、九十人がうんといったのですから出港に踏み切るのは当然でしょう。

出港当日は僕も現地へ出かけて、出港激励の挨拶もしたのですが、行つてみると『むつ』は二百隻ほどの漁船に周りを取り囲まれて身動きできない状況でした。結果的には午前九時出港の予定だったのが、にらみ合いのまま頑張つて夜中の十二時半に出ました。無理してやればもつと早く出港できたかもしれませんのがそうすると怪我人などが出る心配もある。じつとがまんしているうちに風波が高くなり、漁船が散つたので出港したのです。

出港当日をとってもそれ以前の二年間の折衝経過を考えても、地元の意向を尊重しすぎるくらい尊重し、がまんにがまんを重ねてやってきた。そういう意味でこれだけ手を尽して出港に踏み切つ

たことは、むしろ誉められていいと思いますよ。強行出港などといわれる筋合いは断じてありませ  
ん。むしろ『むつ』のとも網をナタで切り、あるいは錆にひもを巻きつけて出港を妨げたり、帰港  
時に土嚢を港に投げ込んで港の機能を喪失させようとした動きのほうが問題でしょう」

### 叩かれ続けた一年

出港した『むつ』は前述したように「事故」を起こした。その放射線洩れはどの程度危険だった  
のか。これによって原子力利用の将来計画や、今後のエネルギー確保政策にどのような影響を与  
えるのか。こうした本質的な議論は事故騒ぎの背後に吹き飛ばされてしまったのである。

「事故」のあと始末はといえば単に十二億円ものカネをバラ撒いて、地元をなだめすかしただけ。  
この「カネでカタをつける」方式が、その後全国各地での開発問題などにどれほど悪影響を与えた  
かは計り知れない。

冷静に科学技術の現状と将来を見つめる本質論と出会うことなく『むつ』はその短い生涯を終え  
た。森山もまた、本質を見据えた論議を呼びかけ続けたにもかかわらず、野党やマスコミは問答無  
用で非難を浴びせることだけに終始した。

「原子力の平和利用は実用段階に入つてまだ四十年も経たない若い科学技術なのです。それだけに  
当初から今日でいうテクノロジー・アセスメントといわれる手法を初めて取り入れていきました。こ  
れはある技術が実際に使われるといろいろな副作用を伴うので、それを防ぐため念には念を入れよ  
ね。

『むつ』はなんともほろ苦い思い出です。しかし、考えてみれば僕がやらなくても誰かがやつた  
し、その結果は同じ問題が起きたでしょう

森山は弱音を吐かない男である。が、この科技庁長官時代はさながらサンドバッグのように叩か  
れ続けた一年だった。もつとも戦闘精神に溢れる森山自身はそうした状態をむしろ楽しんでいた風  
もある。

科学技術庁長官時代やのちの運輸大臣時代を含め、森山の行くところ常に問題が噴出し、マスコ  
ミの「寵児」となるのはいったいなぜなのか。一言でいえば森山が仕事をするからだ。森山は目の  
前にある「煙」はすべて耕さないと気が済まない性格。「こまかしたり逃げたりすることを潔しとし  
ない男である。そっと見て見ぬふりをしているほうが波風は立たない。面倒な問題は触らないでい  
れば、成果もあげられないかわりに傷つくこともない。官僚はもちろんだが、大部分の政治家も結  
局は敢えて「火中の栗」を拾わないことを処世の術心得っている。だが森山は違った。自らが傷つ

くことや世評などはまったく気にしない。いわば猪突猛進である。行くところ摩擦が起つるのも当然だらう。

そうした森山の性格を象徴するエピソードの一つに、こういうのがある。

ある記者が科学技術庁長官に就任したばかりの森山を訪ねた時のこと。ちょうど森山は不在だつたため大臣室で待つてゐると、官房長もやはりそこで待つてゐる。見ていると官房長はひつきりなく欠伸をする。ほとほと疲れたといった表情だったの、記者は「あなた、さつきから欠伸ばかりしているがどうしたんだ」と聞くと「いや、ここ数日ほとんど徹夜だ」「とにかく大臣が大臣室に泊まり込んで、徹夜で勉強しているのでこちらも家に帰る暇がない」と答えた。その勉強ぶりは猛烈なものだつたらしく、局長を呼んである問題について質問する。わからないと「課長を呼んでこい」。課長を呼んでもわからないと「じゃあ、わかるやつを呼んでこい」と現場の担当者まで呼んで、納得するまで徹底的に聞くという具合だつた。

こうしてひとたび事柄に通曉すると森山の目には課長連中は不勉強、不眞面目に映る。森山が在任中、約五十人いた課長のうち半分近くが更迭されている。原子力局長などは一年で三人も交代した。省内では今なお“森山の恐怖政治”として語り草になつてゐる。

役人にとってはたいへんな大臣である。しかし、国民が期待しているのは大臣になつたことだけで満足し、役人のいいなりになつてゐる政治家ではない。政治家が行政府のいいなりになれば、官僚政治に墮してしまえばかりか三権分立の基本をも危くする。

「それまでは優雅だった」(森山)、はつきりいふとんびりムードだった科学技術庁内の雰囲気は森山時代を境に一変したといわれる。

## 森山大臣（科学技術庁長官）の思い出

科学技術庁原子力安全全局長 石塚 貢

第三十代科学技術庁長官として森山大臣が就任されたのは昭和四十八年十一月二十五日の第三次田中内閣発足に際してであった。翌四十九年十一月十一日までの任期の一年間を通じて私は大臣の秘書官を務めさせていただいた。

森山大臣ご在任中の科学技術庁は極めて多事多難であった。衆議院予算委員会で取り上げられ問題となつた日本分析化学校研究所放射能測定データ不正事件、原子力船『むつ』の出港及び放射線漏れ事件、原子力発電所立地難航と電源三法の成立、等々原子力行政をめぐつて諸問題が山積していた。これらの問題処理のため大臣の執務も早朝から深夜に及ぶことが珍しくなく、ある時は真夜中に再度登庁させたこともあった。森山大臣は歴代の科学技術庁長官の中でもたいへんに厳しい大臣ということになっている。万事に厳格で中途半端な妥協は決して許されなかつた。次官以下一丸となつて大臣のご指示にお応えした。庁内の隅々まで緊張感がみなぎり、行政が大いに引き締まつた。森山大臣が残されたご功



原子力船『むつ』の出港式で挨拶。(昭和49年8月)

績は極めて多彩である。形として残されたものも数多くあるが、これとは別に例えば庁内のとくに若い職員に与えた仕事に対する心構えといった教訓は一人一人の心に深く定着したと思われる。大臣はよく若手職員を大臣室に呼んで親しく懇談の機会を設けておられたので、大臣のお考へは庁内によく浸透した。當時を偲ぶよすがとして、科学技術庁創立十八周年記念式典（昭和四十九年五月二十日）における大臣訓示の結びの部分を再録させていただく。

「……就任以来およそ半年、顧みて誠に多事で毎日が力相撲の連続のようであつたので、一年も二年もここで仕事をしたような感じです。しかしながらいふ人に比べれば、長官といつても臨時雇いのようなものであろうから、勝手なことと思うかもしませんが聞いていただきたい。着任当時、大きな事は原子力発電の建て直しでした。そして分析研問

題の後始末、近くはアイソートープの取扱いの不備などがありますし、十年の歳月を費し、

五百億の巨額の投資をした原子力船『むつ』は完成後二年にわたり立往生していること  
も大問題です。原子力に限らず、宇宙開発、海洋開発、ライフサイエンスなどの先端技術  
をはじめ、科学技術振興一般について原子力と同様の問題がないかどうか、この際諸君は  
日頃の業務について再検討してみる必要があると思います。

科学技術庁ができた十八年前にはそれだけの大きな理由があり、このことについては今  
日なお国民が大きな期待を持っており、諸君にしてもこの事について自負してくれている  
と確信します。しかし今日まで十八年の歳月が流れ、この間における世の中の変化に即応  
してゆくことも極めて重要です。このような意味で、この際、諸君のやっている仕  
事の再点検を要望してやまないのであります。私が長官に就任して半年、微力ではありま  
すが自身一生懸命やって参ったつもりです。石川啄木の歌に「ニニニニニニニニニニニニ  
く仕事あれ それを仕上げて死なむと思ふ」とある気概を持って頑張るつもりであります。  
諸君の格別の協力を期待して、挨拶にかえます」

この大臣訓示を身じろぎもせぬ聞いていた職員の緊張した顔が昨日の如く思い出される。  
前年に発生した汚職事件に対する綱紀肅正の意味も込められていたと思う。

大臣任期中に海外出張が二度あった。昭和四十九年二月、全世界を襲ったオイルショック

クを克服するためにニクソン米大統領の提唱でワシントンで開催された「エネルギーに関するワシントン会議」と、同年五月にソウルで開催された「第四回日韓科学大臣会議」への出席がその目的だった。ワシントンへは大平外相と共に日本政府代表として出席され、森山大臣は石油危機を救うものは原子力開発以外にないとのコンセンサス作りに努力を傾注された。訪米を機会にフレッチャーNASA長官とも会談されたが、同長官とのお付合は大臣が退任後も長く続いている。韓国では朴大統領とも会談され、その際には森山大臣の日韓協力に尽されたご功績に対し、大統領から韓国最高級の勲章が贈られた。実はもう一つ同年九月のウイーンでの国際原子力機関年次総会に出席と西独・仏等欧洲諸国歴訪が計画されていたが、九月一日に発生した原子力船『むつ』の放射線漏れのトラブル処理のため実現しなかったのは残念であった。この時は最後まで予定が確定せず、いろいろな場合を想定して可能性のあるフライトを手当り次第に予約したため、旅行エージェントのコンピューターが混乱し、どこを呼び出しても森山大臣予約済みのサインが出てコンピューターはパンク寸前だったことを後日聞かされ恐縮したものである。

前述のとおり、森山大臣は大変に厳しく、職員はみな強く畏敬の念を抱いていたようであるが、反面その気さくなお人柄で人気があった。若い職員とよく懇談されることもそれを示す一例であるが、お昼には府内の一般食堂にぶらりと現われ、驚く職員と同じテーブルで談笑しながら昼食をとられるという場面もあった。また秘書官室の女性職員や警護官

公用車の運転手などといった人達には常に笑顔で接し、極めてアット・ホームで慈父の如くであった。

秘書官在任中の私は、なんとかその任務を全うしたいということしか念頭なく、寝食を忘れてお仕えした。それでも大臣には幾度も叱られた。任期途中で私共の年次の職員が管理職への昇格時期を迎えた時、同期の者が課長に昇進した時、大臣は私を呼んで「君は課長になりたいか、それともこのまま秘書官を続ける気があるか」と問われた。私は即座に「秘書官を続けさせて下さい」とお願いし、そうなった。私は大臣の暖かいお心遣いに触れて感激した。それからというものは一層仕事に身が入つたことを憶えている。

一年が経って内閣改造により大臣は役所を後にされた。退任された後も大臣によつて強く引き継ぎたかった。その後森山先生は運輸大臣をはじめ党の要職を歴任されたのであるが、科学技術庁のことをいつも気に掛けておられた。お目にかかると必ずその後の科学技術行政について質問があつた。そんなある日「君が秘書官の時はたいへんだつたろうがよくやつてくれた」としみじみいわれたことがある。私はその時あの一年間の精進は無駄ではなかつたということ、そして苦しかつた一年間の思い出も霧がはれるように消えて行くような気がした。最近の先生は私の顔を見ると必ず「まだ局長にならないのかね」と尋ねられたものである。大臣秘書官を経験したからといって局長になれるとは限らないが、もし実現したら喜んで報告を受けていただけるであろう。

何とかご期待を裏切りたくないものだと心秘かに思い続けていた。やつとその日がやつてきたのは森山先生が急逝されて一ヶ月余りたつた六月二十三日のことだった。多くの方々からご祝詞を頂戴したけれども、私にはなにか満たされないものが残つた。ご存命中に報告できなかつたことが誠に残念でならない。

いま私の手許に「嵐の中の原子力行政——森山欽司」と題する小冊子がある。昭和四十九年十一月十日社団法人外交知識普及会発行の時事評論シリーズ第六巻第十三号である。森山大臣退任直後に刊行されたものであるが、その内容は同年十月二十六日の第一回「原子力の日」記念式典における森山大臣の挨拶を整理とりまとめたものである。目次には、初めての式典、問題山積の原子力行政、原子力発電の建て直し、分析研問題の後始末、アイソトープ行政の刷新、「むつ」問題、試練を乗り越えよう、災い転じて福となす、といった見出しが並んでいる。その年の「原子力の日」記念式典は森山大臣の肝煎りで初めて挙行されたものである。その後この式典は少しが形を変えて原子力安全功労者表彰式を兼ねて毎年挙行されるようになっており、昨年も盛大に行われた。この小冊子は森山大臣の原子力行政の一年間を総括したものともいえるが、読み返すと当時のことが甦えり、感無量である。いま読むとすでに歴史化した部分もあるが、私にとっては生涯忘れる事のない大切な一年間であり続けるであろう。